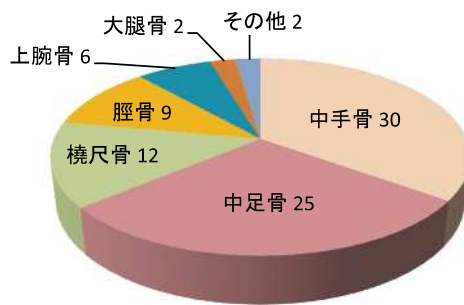


牛のお産のときに「子牛の肢が折れてしまった！」という経験がある生産者は少なくありません。獣医師である私達は多くの骨折症例を経験していますが、どの部分の骨折が多いか、また、どの程度治るものか、統計的な数字は把握していませんでした。生産者としては、「この骨折は治してあげられないの？」と疑問を持たれるでしょう。そこで、私が担当する日高地区の過去8年間（平成21年4月～平成29年3月）の記録を基に調査しました。

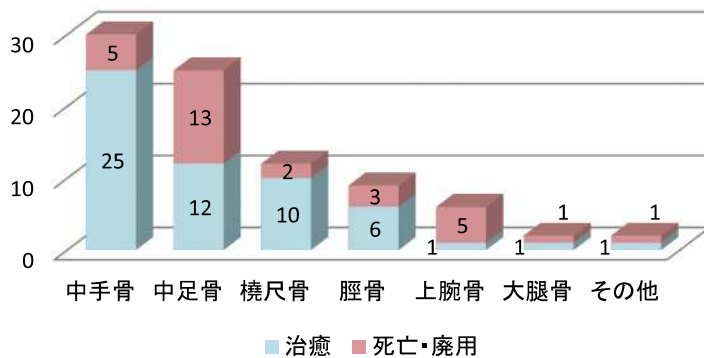
どの部分の骨折が多いかを、グラフ1に示します。最も多かったのは前肢の左手骨骨折、次いで後肢の中足骨骨折でした。この2か所の骨折で半数以上であることに加え、生後10日以内の骨折の割合が高いため、分娩時や生後間もない時期では特に注意が必要です。

グラフ1：骨折箇所別に見る症例数



次に、どの程度治っているかをグラフ2に示します。ここで注目したいのは、中足骨骨折が前肢の同部位である中手骨に比べ、非常に治癒率が悪いことです。この部位の骨折は、ほとんどの場合プラスチックキャストによる外固定で治癒しますが、前肢よりも注意して処置しなければならぬことが示されています。もう一つ注目

グラフ2：骨折箇所別に見る治癒および死亡・廃用数



したいのが、後肢の脛骨骨折の治癒率が高いことです。これは、骨折をプレートで固定する内固定法（画像参照）を行っているためです。

画像：脛骨のプレート固定



この内固定法は、日高支所畜高度医療センターで処置したもので、まだ日高地方以外ではほとんど行われていないと思います。従来であれば治療対象とならず、廃用とされていた症例を治癒へと導く方法として期待されています。残念ながらもまだ完成された技術ではありませんが、今後1頭でも多くの症例を治すためにも、技術の確立と普及を目指しています。

（獣医師・後藤忠広）